

2024年度 目白大学 学位授与式

式 辞

本日ここに目白大学より博士、修士および学士の学位記を授与された皆さん、まことにおめでとうございます。

目白大学の母体である目白学園は、大正12年(1923年)五月に創設され、一昨年、創立百周年を迎え、今年102年目を迎えます。ここにいらっしゃる多くの修了生・卒業生と共にこの百周年を迎えることができたのは大きな喜びでありました。しかし振り返れば、4年前、今回学部を卒業される皆さんの多くが入学した時には、前年からの新型コロナウイルス Covid-19 の感染拡大がまだまだ治まっておらず、当初はまだ多くの授業がリモートで行われ、実習がある学科はそれもなかなかできない状態でありました。今回大学を卒業するみなさんの多くは、入学のスタート時から新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受けるという、困難な学習生活を送ることとなってしまいました。

この感染拡大をきっかけに、私たちの社会のあり方や日常が大きく変わってしまったと言えます。2020年から2023年前後までの間は、目白学園の百年の歴史のなかでもとりわけ困難で、かつ大きな転換を迫られた期間として、これからも私たちの記憶に残ることになると思います。そうした不自由と困難の中で大学生活をスタートさせ、また大学院の授業も一部は制限されることもある中で、日々努力を重ね、本日ここに修了・卒業の日を迎えられた皆さんに、目白大学の教職員を代表して、敬意を示すとともに、心よりお祝いを申し上げます。また、皆さんの学業を物心の両面から支え、この晴れの日を共に迎えられたご家族の皆様にも、お祝いと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

今やデジタル革新・デジタルトランスフォーメーション化いわゆるDX化という言葉は常識となり、さらにはこの二年ほどで、AI(人工知能)、特に生成AIと言われるものを一般の人でも利用できるようになり、全く大げさでなく、世界のあり方自体が以前とは大きく変わって来ってしまったように感じます。

2020年から2021年の大部分の期間、私たちは、新型コロナウイルス感染拡大前にはほとんど知られていなかったZOOMなどのテレビ会議システムを使って授業を行ったり、ネット上の学習管理システムを使って課題の提出を求めたりしました。科目によっては遠隔授業でも効果が十分あったものもありましたが、入学当初から大学に通えないために友だちも作ることができず、またリモート学修が難しかった科目もありました。

みなさんはそうしたハンデの中で、修了・卒業をすることができましたが、コロナウイルス感染拡大時に広く行われるようになったテレビ会議も、今や離れた場所でも顔を見ながら会議ができるということで、企業などでも当たり前のように行われることとなりました。そのほかでもテクノロジーの発達はめざましく、誰しもそのような社会に出て行くのに、不安があるかと思います。学生時代と違い、場合によっては厳しい目で見てくる実際の人と接

することになるので、その局面においてこれでいいのだろうか悩むこともあると思います。私が思うことは、どこかに決まった正解があると考えることではなく、その状況で与えられた条件の中で、常に自分の頭で考えて選択していくこと、選んでいくことが大事だと思います。

今までのテスト勉強では、どうしても正解は何かは気になり、正解を早く教えてほしいということになり勝ちですが、実際には、生きていく上で「正解」と言われるようなものはありません。そんなことはよく言われているし、わかっていますよ、と言う方もいるかもしれませんが、本当に日常生活でも、仕事の現場でもこれと決まった正解はないのです。同じような意味で、失敗するといけなから、やり方を先に教えてくださいと言う人もいます。

もちろん、何かをやってうまく行かなかったと感じ、後から振り返って、反省することが出てくることはいくらかもあるでしょう。ですが、まずは結果を気にし過ぎず、自分の頭で考えて、その上で場合によっては助言をもらいながら、自ら選択していくことが大事です。選択をし、経験を積んでいくことで、自分の力を付け、場合によっては新たな道が開けて行くのだと思います。

日本人はとにかく正解か不正解か、あるいは成功か失敗か、あるいは良かったか悪かったかということに必要以上にこだわる性質があると思っています。もしかしたら、これは日本語の特性で、やったことが正解か不正解か、あるいは成功か失敗か二つのどちらかに決めたがる性質があるのかもしれませんが。たとえばロケットの発射を直前で取りやめたことを、記者会見で「それを失敗という」と決めつけた記者が出たりしたことがありました。そうした雰囲気の流れもあって、集団の中で新しいことをやってみようと考えても、失敗と言われたらいやだからやめておこうとか、ネガティブな気持ちになりやすい面もあるかと思っています。

社会に出ると、どうしてもならないようなことを感じたり、自分では何もできなさようなことが起こったりします。しかし、考えてみれば私たちは常に、小さなことを含めて、毎日選択を迫られ、選んでいますね。今日はお昼に何を食べようとか、友だちの誰かに連絡して帰りにちょっと会おうとか、いつも何かを選択しています。基本的には、どうしようもないように見えることでも、周りの雰囲気がどうであろうと、自分で道を探して、それを選択していくという気持ちが必要だと思っています。

アメリカのコロンビア大学教授で、シーナ・アイエンガーさんという女性がいます。インド生まれで、シーク教という厳格な宗教を守る家庭に育ち、その両親とともにアメリカに移住しましたが、その間に病気で目が見えなくなるというハンデを負いましたが、その中でアイエンガーさんは勉強を続け、「選択の科学」という本を出しています。彼女はインタビューの中で、「しかたがない」と言って諦めるのはやめようと言っています。これは英語のインタビューでしたが、「しかたがない」というところは日本語で言っていました。日本人がよく使う言葉、という認識があったのでしょうか。その彼女がその後、こんなことを言っています。少し長くなりますが、引用しますと、

「毎日ニュースを聞いていると簡単に無力感を感じてしまいます。でも私たちは選択することで変化を起こすことができます。どんな選択肢があり何を選ぶのか、見つけ出す力

が私たちにはある。それが選択のすばらしさです。不確実なことが多いということはチャンスも多いということです。小さなエコーチェンバー（つまり、似たような意見の中）に閉じこもらずに、異なる考えに触れる人が増えればより斬新なアイデアを生み出せるようになります。問題に対して意味ある選択ができるというのはすばらしいことで、それは人間だからこそできることなのです。」

この中の「エコーチェンバーに閉じこもらずに」というところが印象的で、「エコー」は反響ですね。「チェンバー」は「小さな部屋」とか「寝室」ということで、小さな空間で響き合うということを指しています。それはつまり、親しい友人の中での話とか、意見があまり変わらない人たちだけの会話の中だけで生きていることを示しています。つまり、人は知らず知らず、同じような意見の中で心地よく生きていて、ほかの意見は少し違うというだけでも、考えに入れられないということをしてしまいます。なぜかというとその方が楽だからです。

私がこの話のエコーチェンバーという考えに大きな示唆を受けました。先ほど申し上げたように、小さな部屋の反響という意味から来てますが、場合によってはかなり巨大な空間で、たとえば日本全体で、このエコーチェンバーが起こっているかもしれません。そうした中では似たような考えばかりなので、問題がおこっても何の新しいことも出て来ず、自分のためになる新しいアイデアも出て来なくなります。何か悪いことが起こると、犯人探しをして、この人が悪いんだと口々に言い合って、終わりになる。そこからは何も生まれません。

そうした状況に陥らないためには、まず、自分が知らず知らず同じような人の話だけを聞いているのではないか、といつも疑ってみることが必要です。一步離れて自分を眺め、もしかしてエコーチェンバーの中にいるかもしれないと気がついたら、その中にいないと思う人、異なった考えの人を探して、その意見を積極的に聴いてみるのが大事です。

「コミュニケーション能力が大事だ」とはよく言われることですが、「コミュニケーション能力」とはよく知っている仲間と同じようなことを話し続けることでは決してなく、本来は、自分にとっての他者、考えの違う人と、意見を伝え合い、交わし合う能力だと思います。みなさんは、これで学生生活は終わりとなり、社会に出て行くことになります。それぞれ目指す道も違うことでしょう。たとえば、会社や施設に入れば上司の評価は当然意識することになるでしょうし、先輩や同僚にどう思われるか、ということも気になるでしょう。ですが、その場合に一番大事なのは、自分が他人から見てどう映るかではなく、またその中で気に入られようとただ同調することでもなく、あるいは自分の中に閉じこもることでもなく、自分の考えを伝え、自分とは違った世界に生き、考えも違う人の意見を聞きながら、問題解決のカギを見つけて、自分の進むべき道を見つけていくことだと思います。それによって、はじめて自分の仕事も生活も満足できる方向に行けるのではないのでしょうか。丁寧に話していけば、人間関係で多少のことがあっても、動じることはありません。もちろん、初めから思い通りに行かないと思いますし、問題が深すぎて簡単には行かない場面にも遭遇すると思います。しかし、自分で自分が納得できるような状況であるかということを第一にし、それに足りないと思ったら、それを解決する道を探して、見つけられるよう努力をすればよいのです。

人や社会との関わりで言えば、いつも、前向きに粘り強く社会に関わっていただきたいと思っています。今日、世界では、残念ながら互いの意見に妥協点を見出せず、ウクライナやパレスチナなど、戦禍が起こっているところがあります。これは個人の力ではどうにもならない大きな問題ですが、時に大きな対立や矛盾が、この社会の現実として存在する、ということから目をそらさず、相互理解がほとんど無理と思われたことでも、目白大学で学んだ人間として、言葉によるコミュニケーションの場を作り、より良い道を選択しようという態度を忘れないでほしいと思います。

本学の建学の精神は、みなさんが学んだ教室に掲げてあった「主師親」で、本学の創設者佐藤重遠先生が掲げたこの三つの文字の意味を、学部生の方も大学院生の方も入学式の間から聞いていると思います。

修了・卒業にあたって改めて考えてみると、そのうちの「主」は「国家・社会への献身的態度」と現代では解釈されていますが、端的に言えば「社会貢献」ということだと思います。新宿キャンパスでは、正門から入ってすぐある記念館の脇に、学園の創設者佐藤重遠先生と、第2代理事長の佐藤フユ先生の銅像があるのは、みなさんもご存じですね。貧しい小作農の家の出であるにもかかわらず、さまざまな人の援助を受けて勉学を続け、東京帝国大学を卒業して、三菱合資会社に就職後、衆議院議員を務め、さらに本学園を設立した佐藤重遠先生は、おそらく自分を直接助けてくれた人に感謝するということだけでなく、自分を育ててくれた社会全体に貢献するべきと言っているように思います。

「主師親」の「師」は本学ホームページでは「真理探究の熱意」という解釈が書かれています。真理探究と言うと簡単ではなさそうですが、一般的な「正解」というものがないこの世界で、それぞれが自分にとって取るべき道は何か、それが広い意味で自らの真理だと考えれば、常にそれを追求して、アイエンガーさん流に言えば、それを選択して生きていくことと言い換えることができます。そして「親」は「人間尊重の精神」と解説されています。「人間尊重」とは、自分自身を含めた人間のあり方にいつも目を向け、それを尊重する生き方をすることとも言えます。みなさんは、この建学の精神の3つの言葉の一番奥にあることを、大学を卒業後も持ち続け、困った時には、この精神を思い出していただきたいと思います。

初めに申し上げたように、生成AIなどの発達で、これからさらに予測のつかない世界が待っていますが、みなさんは目白大学で学んだことを誇りとして、これからも自らを磨くために学び、そして自信と勇気を持ち、本学の建学の精神を忘れずに、自らが生きていく社会に貢献できるように、ひとりひとりの役割を果たしていただければと存じます。目白大学の教員として、いつまでもみなさんを応援して行きます。

これを以て学長の式辞といたします。本日はまことにおめでとうございます。

2025年3月27日
目白大学学長 太原 孝英